

渡部祐一

田村 学

谷口明正

VIEW21編集部 統括責任者
柏木 崇

小川幸司

より質の高い学びの場となるために、 これからの学校に求められていること

國學院大學 人間開発学部初等教育学科 教授 **田村 学** / 長野県蘇南そなん高校 校長 **小川幸司** /
愛知県立豊野ゆたかの高校 進路指導主事 **谷口明正** / 宮崎県立宮崎大宮高校 生徒指導主事・主幹教諭 **渡部祐一**

新学習指導要領の解説では、特別活動は「各教科等の学びの基盤」と説明されている。予測困難な時代においても、自らの人生を切り拓いていけるような資質・能力を育成すべく、授業改善や探究学習の拡充が進む中、「学びの基盤」である特別活動は、どのような教育活動であるべきなのか。そして、コロナ禍における気づきや学びを踏まえて考える「教育の『これから』」について、本誌8月号を起点に展開したシリーズ特集に登場した3人の教師と識者が語り合った。

特別活動で育まれる 進路意識や協働性

柏木 まず、今号の特集のテーマである特別活動についてお話を伺います。新学習指導要領の解説では、特別活動の課題として、身につけるべき資質・能力が必ずしも意識されないまま指導が行われてきたと指摘しており、各教科等の学習と関連づけながら、特別活動において育成を目指す資質・能力を示す必要があると記されています（P.22 図1）。現場の先生方からは、特別活動は前年踏襲になりがちで、形骸化しているように感じるといふ声も少なからず聞

こえてきます。本誌のシリーズ特集「教育の『これから』を考える」にご登場いただいた先生方は、特別活動の意義をどのように捉え、実践されていますか。

谷口 生徒同士で協働し、問題解決に取り組む中で、よりよい集団を形成するために必要な力を最も育みやすいのが特別活動です。リーダー経験の少ない生徒が多い本校では、リーダーシップを学ばせる上で、特別活動は大きな役割を果たしています。生徒が楽しく取り組みやすく、主体性が発揮されやすい特別活動は、学校の特色が表れる教育活動であるはずですが、そうした意義を現

場の私たちはもっと意識してもよい気がします。学習指導要領の改訂が、特別活動の意義を改めて確認する契機になってほしいと考えています。

小川 本校では、特別活動は教科の学習や探究学習で学んだことを踏まえて自身の生き方を考え、キャリアデザインを描いていく場と捉え、学校の中で最も大切な活動の1つと位置づけています。本校が育成を目指す資質・能力として、思考力・判断力・表現力や協働性、探究力などを掲げましたが、コロナ禍で特に育成の必要性を感じるようになったのが、レジリエンス（回復力）と自己効力感です。それらの資質・能力

を育成する上で、特別活動が果たす役割は非常に大きいと考えており、特別活動を含めた教育活動全体の見直しを図っています。

渡部 本校の特別活動の特徴は生徒主体で行われることです。例えば、中学生向けのオープンスクールでは、生徒会が中心になってスタッフを集め、計画から実施までを生徒が行います。先輩が後輩にノウハウを伝えていくため、教師が指示を出す必要がほとんどありません。そうした生徒主体の活動を通じて、協働性や他者を認める力、自律する力など



田村 学 たむら・まなぶ
人間開発学部初等教育学科
教授

専門はカリキュラム論など。新潟県公立学校教諭、同県柏崎市教育委員会指導主事、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官、同省同局視学官などを歴任。同省で新学習指導要領の作成に携わる。2017年度から現職。著書に『深い学び』（東洋館出版社）など。

田村教授による「主体的・対話的で深い学び」についての解説は、2020年10月号・特集P.24～27で紹介。

が育つと考えていますが、私たち教師が特に配慮しているのが、当事者意識の醸成です。どのような取り組みにも、生徒によってかわり方が濃淡があります。淡いかかわりができるだけ濃くなるよう、当事者意識を育む生徒への声かけを先生方には心がけてもらっています。

よりよい集団づくりが 質の高い学びにつながる

小川 生徒の視野を広げることも、学校外を学びの場とする機会を有する特別活動の目的の1つだと考えています。特に、本校のような地方の高校で学ぶ生徒は、限られた生活体験から得た知識だけを基に、進路選択を行っていきます。多様な生き方や広い世界をできるだけ多く見せることで、生徒が自分の足場を広げられるのではないのでしょうか。

谷口 学校内だけで生徒の視野を広げることには限界がありますよね。本校では、豊田市と連携して生徒にSDGsについて学ばせ、企業が抱える課題に対する方策を提案する活動を始めています。学校外の大人に考えを伝えることが、生徒の視野を

図1 特別活動の課題

- 身に付けるべき資質・能力は何なのか、どのような学習過程を経ることにより資質・能力の向上につながるのかということが必ずしも意識されないまま指導が行われてきたという実態も見られる。特別活動が各教科等の学びの基盤となるという面もあり、教育課程全体における特別活動の役割や機能も明らかにする必要がある。
- 社会参画の意識の低さが課題となる中で、自治的な能力を育むことがこれまで以上に求められていること、キャリア教育を学校教育全体で進めていく中で特別活動が果たす役割への期待が大きいこと、防災を含む安全教育や体験活動など、社会の変化や要請も視野に入れ、各教科等の学習と関連付けながら、特別活動において育成を目指す資質・能力を示す必要がある。

*文部科学省「高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 特別活動編」を基に編集部で作成。

田村 学校外に活動を広げることがは確かに大切なことですね。ただ、生徒が視野を広げるためには、学校外の人のなかかわり以上に、自身の内面、そして自分の所属する集団の一人ひとりの個性を理解することが重要だと思います。自分が属している学校やクラスの課題、自分の日常生活の問題だからこそ、谷口先生が述べられた通り、主体性が発揮しやすく、渡部先生が配慮されている当事

者意識の醸成につながりやすいという面が特別活動にはあります。学習指導要領に「集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせる」とあるように、自分が所属しているコミュニティを足場にして、人間関係の構築やよりよい集団づくり、集団の形成者としての立場を学ばせることも、特別活動の意義の1つだと思います。だからこそ、学校内のホームルーム活動や生徒会活動、学校行事が大切になるのです。

小川 学校の中で、よりよい集団づくりに寄与するような資質・能力を育んだ上で、学校外の地域や社会の課題を考えたり、実際に学校の外に出ていたりすることで、探究活動やキャリア学習もより深みを増していくというわけですね。学校内のコミュニティにおける活動と学校外のコミュニティにおける活動の両方があるから、生徒は成長するのだと、私は考えています。

田村 特別活動による集団づくりがなぜ必要なのかという点、よりよい学びにつながるからです。生徒一人ひとりが集団の形成者として他者を認め、力を合わせ、全体を高めていくという意識を持つ。それにより

長野県蘇南高校の取り組みは、2020年度8月号特集P.26〜29で紹介。

長野県蘇南高校
 ◎「開拓者の精神を具現することのできる学校を」を建学の精神として、地域社会の期待に応える人材の育成を目指す。文理・経営・ビジネス・ものづくりの3系列制。キャリア教育を重視し、地域連携・教科横断型の「蘇南学」、インターシップなどに取り組む。
 ◎設立 1953（昭和28）年
 ◎形態 全日制/総合学科/共学
 ◎生徒数 1学年約70人
 ◎2020年度進路実績（現役のみ）
 公立大は、群馬県立女子大、新潟県立大、福井県立大、都留文科大、長野大に5人が合格。私立大は、麗澤大、中京大、大谷大などに延べ16人が合格。短大、専門学校進学28人。就職22人。
 ◎URL <https://www.nagano-ced.jp/sonan-hs/>



小川 幸司 おがわ こうじ
 長野県蘇南高校 校長
 教職歴32年。同校に赴任して1年目。地理歴史公民科。

個人の力が発揮されやすくなると同時に、全体で成長していく組織風土、集団のよさを守り伝えていく伝統が育まれ、それが組織の形成者一人ひとりの成長を促すのです。つまり、

愛知県立豊野高校の取り組みは、2020年12月号・特集P.22〜25で紹介。

愛知県立豊野高校
 ◎「真心」を校訓とする。特別活動の目標は、「健全な精神と体の育成を目指す」。ホームルーム活動で生き方・将来を、部活動で協調・自律の精神を、行事や生徒会活動で創造的能力と企画力を高める。献血運動や地域清掃など、ボランティア活動にも力を入れている。
 ◎設立 1986（昭和61）年
 ◎形態 全日制/普通科/共学
 ◎生徒数 1学年約320人
 ◎2020年度入試合格実績（現浪計）
 国立大は、岐阜大、名古屋工業大、公立鳥取環境大に4人が合格。私立大は、東京理科大、日本体育大、愛知学院大、愛知大、豊橋創造大、名古屋学院大、名城大、鈴鹿医療科学大、近畿大などに延べ344人が合格。
 ◎URL <https://yutakano-h.aichi-c.ed.jp/cms/>



谷口 明正 たにぐち あきまさ
 愛知県立豊野高校 進路指導主事
 教職歴14年。同校に赴任して10年目。数学科。

ホームルーム活動と生徒会活動、学校行事から成る特別活動を深めれば深めるほど、生徒の相互理解が進み、学年やクラスの特徴も明確になっていく。それが「主体的・対話的で深い学び」を促進させ、生徒一人ひとりの学びを豊かにしていくのです。学習指導要領の解説に「特別活動が各教科等の学びの基盤となる」とあるのは、まさにそのことを言っているのだと思います（図1・P.24図2）。



柏木 崇
 VIEWS21編集部
 統括責任者
 かしわぎ たかし

宮崎県立宮崎大宮高校
 ◎学校紹介および取り組みは、本号P.12〜15で紹介。

渡部 祐一 わたなべ ゆういち
 宮崎県立宮崎大宮高校
 生徒指導主事・主幹教諭
 教職歴37年。同校に赴任して4年目。英語科。



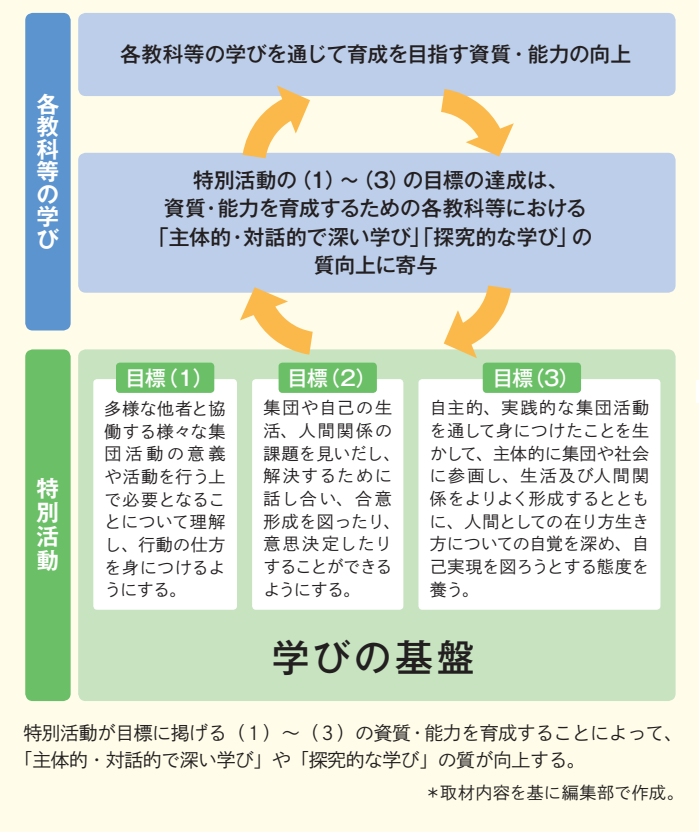
「学び」を促進させ、生徒一人ひとりの学びを豊かにしていくのです。学習指導要領の解説に「特別活動が各教科等の学びの基盤となる」とあるのは、まさにそのことを言っているのだと思います（図1・P.24図2）。
渡部 特別活動による集団づくりと教科等の授業での「主体的・対話的で深い学び」の実現には、強い関係があると思います。集団で何かを成し遂げた経験があれば、次もみ

生徒に内省を促し、成長につながる評価とは

みんなで頑張ろうという気持ちになれば、仲間との絆が深まれば、周りの様子が見えるようになって、主体性や協働性が発揮されやすくなり、授業が活性化され、思考の深まりが期待できます。「学びの基盤」という言葉を、私は、土壌というイメージで捉えています。特別活動によって耕した土壌が豊かであるほど、そのほかの教育活動を通じてまく種からの実りも、豊かになると思います。

柏木 特別活動をどのように評価し、生徒の成長につなげていくのかという点も、現場の先生方にとって今後重要になってくるテーマかと思っています。特別活動を「学びの基盤」とするためには、どのような評価のあり方が求められるでしょうか。
谷口 最も大切なのは、取り組み後の振り返りだと思います。本校では、教師による「値踏み」としての評価ではなく、生徒の自己評価を重視しています。特別活動だけでなく、教科等の学習面、進路面でも年度初めに目標を立てさせ、年度末にすべて

図2 「各教科等の学びの基盤」としての特別活動



の取り組みを総括して、生徒自身が「やりたいこと」「自分に向いていること」「自分ができていること」について振り返りを行い、自分の強みはどこにあるのかを認識させています。私が担任をしていた時は、行事後の面談において、最大の壁は何だったのか、それをどのように乗り越えたのか、生徒に話をさせていました。内省を深める問いを常に投げかけ、アウトプットさせることが、教科指導とは異なり、テストなどの機会の

ない特別活動の評価では特に大切だと思えます。

田村 評価について考える時、教師が生徒を見取る側面と、生徒が自身の学びを省察し、成長につなげる側面がありますが、後者は意外とおざなりにされることが多いため、注意が必要です。行事が終わった直後、生徒は大きな達成感に包まれますが、本当に大事なものはその後です。行事を通して自分がどう変わったのか、集団の力は高まったのか、その

中で自分は何ができたのかを振り返ることが成長につながります。

また、先生方は、生徒の成長を客観的に見取るための評価規準を、特別活動においてもつくる必要があります。この時、ポイントになるのは、いわゆる非認知能力を見取るための評価規準を、具体的に言語化できるかどうかです。例えば、行事については「お互いの違いやよさを認め合いながら学校行事を推進している」「ボランティアについては「毎朝欠かさことなく活動を続けている」などと言語化できれば、教師は目の前の生徒の姿から、「学びの基盤」としての資質・能力が育っているかを判断できます。非認知能力の定義については、各校の実情に鑑み、具体的に言語化することが重要です。明確な評価規準ができれば、先生方が育てるべき資質・能力が鮮明になり、学習活動の精度も上がっていくはず

です。

小川 これまで教師が指導要録に書いていた特別活動の評価は、「実行委員を誠実に務めた」「文化祭を成功させた」といった程度で、必ずしも生徒の努力や成長について言語化できているわけではありませんし

た。育成を目指す資質・能力をゆるやかにイメージしておくことで、教師は客観的な見取りが可能になるとともに、生徒が自身の学びを掘り下げ、より適切に自己評価を行うことを支援できるでしょう。今後、本校の課題であるレジリエンスと自己効力感についても、特別活動でどのように伸ばしていくのかを言語化し、取り組みのイメージを生徒と教師で共有していきたいと思えます。

谷口 活動ごとに育成を目指す資質・能力を明確にすれば、教師は「今回の活動では○○の力を伸ばすように心がけよう」と、生徒に具体的に発信できますね。一方、生徒は事前に「自分の○○の力は今のレベルにあるのか」と意識することができ、事後に「取り組み後にどのレベルになったのか」「そう思ったのはどういった行動ができたからか」と考えることで、より具体的に次につながる自己評価ができるようになると思えます。

田村 その上で、特別活動はそれぞれが単発の教育活動として捉えられないように、関連性、連続性を意識してプログラムを構築していくことも大切です。

総括◎コロナ禍を経た「学校」の姿とは

学校の価値が再認識された 今こそ教育の本質への回帰を

柏木 最後に、想定外のコロナ禍で、教育のどのようなことが浮き彫りになったか、そして、これから学校はどうあるべきなのか、先生方のお考えをお聞かせください。

田村 コロナ禍で私たちが再認識したことが2つあると思います。1つめは、学校という社会資本の持つ価値です。休業になった当初は、その状況を喜ぶ生徒はいたものの、程なくして友人などに会えないことを寂しいと感じ、保護者も学校の大切さを実感しました。臨時休業を機に、学校は社会の基盤であることが広く共有されるとともに、学校に対する期待が一層高まったのも、この1年の大きな変化だったと思います。それは、学校を支えてきた多くの先生方の努力の結果にはかたまりません。

2つめは、学びの意義です。答えが1つではない問題に大人たちが右往左往する姿を、子どもたちは目の当たりにしました。これまで、大学入試が変わらなければ授業も変わ

らないと言っていた先生方も、答えが1つではない問題に向き合うことに、学びの本質的な価値があるということを考えさせられたはずで、コロナは災厄ではありますが、発想を変えてみれば、今が教育の大きな転換点になる可能性がありますし、むしろそうしなければならぬと思います。そうした流れを、教育の本質への回帰と捉えて、学校現場に定着させられるかが、これからのトッピングリーダーやミドルリーダーに問われるのではないのでしょうか。

渡部 転換点にできるよう、まずは校内での対話を大事にしたいと思います。コロナ禍によって多忙感が高まっているのは事実ですが、忙殺されることなく、何とかして、ベテラン、若手、それぞれが思いを語り合える機会を設けるべきだと考えています。一方で、社会に開かれた教育課程を目指す中で、学校だけでなく、行政、保護者、教育にかかわるすべてのステークホルダーが連携して、子どもたちにとって必要なことを考えていく必要性を感じています。

谷口 臨時休業中の2か月間は、職

員室で先生方と教育とは何か、学校とは何かといった根源的な問いについて話し合う機会に恵まれました。また、若手教師が率先して学校を変えていこうという雰囲気が出てきたのも、大きな変化の1つです。本校での学校のあり方についての議論では、以前はベテランの意見に左右されることが少なくありませんでした。しかし、今年度は、20〜30代の先生方が「何が起きるか分からない社会だからこそ、私たちにもできることがある」と、ベテランを巻き込んで新しいことに取り組み始めており、非常に心強く感じています。

小川 私は「つながりの大切さ」を再発見しました。生徒同士、生徒と教師の心がきちんとつながっているかを意識し、評価や見取り、日頃の声かけや支援を丁寧に行うことで、つながり続けることが大切なのだと改めて感じています。同時にレジリエンスや協働性など、生徒に求めている資質・能力を教師が持っているかどうかも問われた1年だったと思います。私たち教師の側も、生徒と同じように、学び続ける必要があることを痛感しました。まだまだ大変な状況が続くと思いますが、絶えず

新しいことに挑戦をしているという意識を学校全体で共有して、未知の次のステージへ前進していきたいと考えています。

田村 これからの学校教育では、生徒一人ひとりにふさわしい個別最適化された学びが必要となりますし、答えが1つではない問いや解決困難な問題について考える探究的・協働的な学びが一層重視されるようになるはずです。高校の先生方には、従来通り専門性をストロングポイントとして持ちながら、アクティブな学びをコーディネートする力がさらに求められるでしょう。

高校生にぜひとも身につけてほしいのは、「未来社会を創造する主体としての自覚」です。未来を創造する主体は自分たちであることを一人ひとりが自覚し、積極的に社会に参画し、つくり上げていく意欲を持つ。そうした学び手を育てることも、これからの学校教育の使命と言えるかもしれません。

柏木 今を生きる私たち一人ひとりが、未来をつくる当事者として、これからの教育のあり方について考え続けることが重要だと思いました。本日はありがとうございました。